

令和2年度 新発田市遺跡出土品展

発掘された文字 ～地下に埋もれたメッセージ～

令和3年2月5日（金）～3月24日（水）／イクネスしばた 展示室

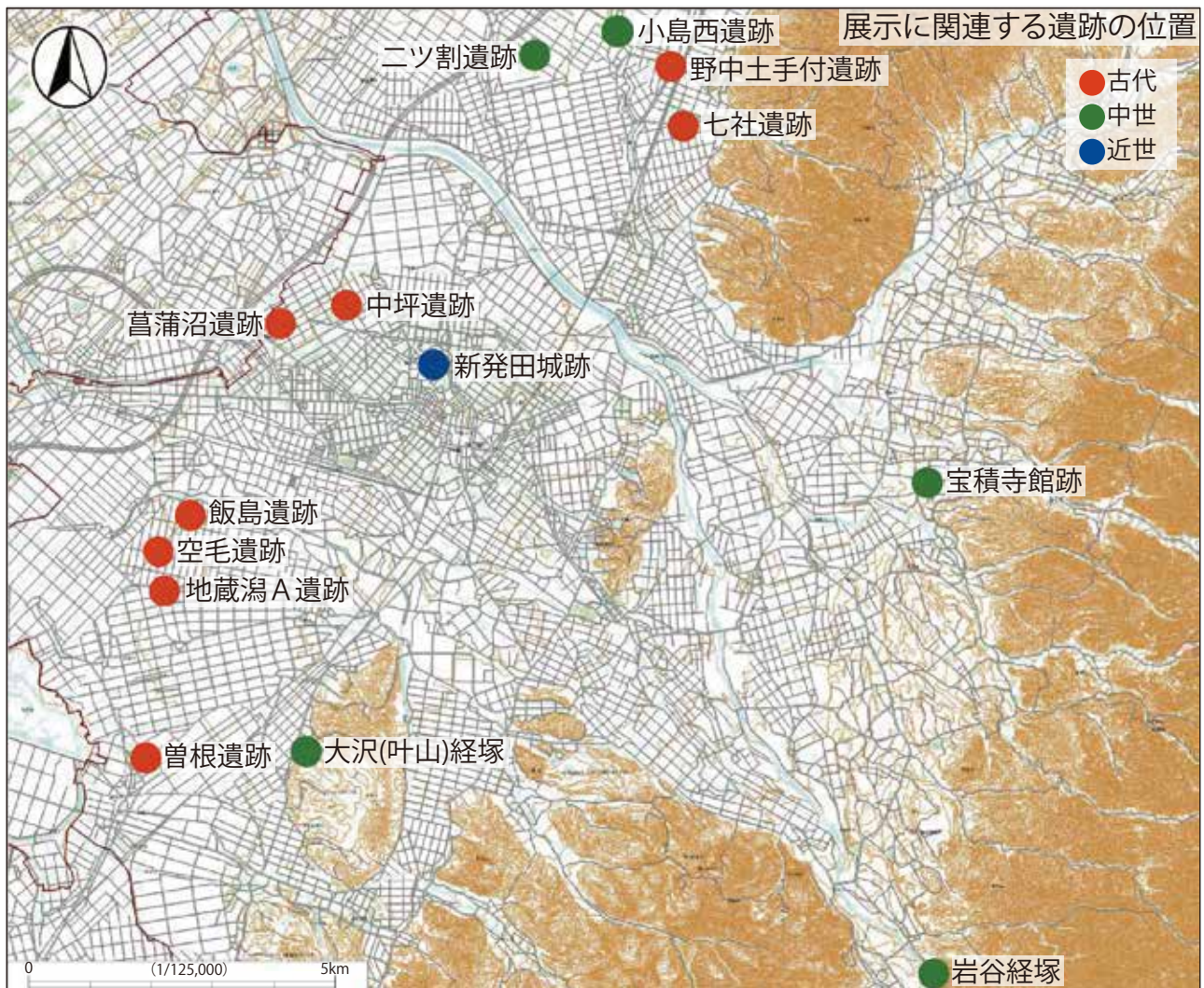
主催：新発田市教育委員会

開催にあたって

発掘調査をすると、土器や木などに文字の書かれたもの（文字資料）がまれに見つかります。それらの内容からは、当時の生活や文化の一端を垣間見ることができます。

今回の展示では、市内の古代・中世・近世の遺跡から発掘された文字資料を御紹介します。

かつてこの新発田の地で、文字を使っていた人々の姿を想像しながら御覧いただければ幸いです。



※ この図は、国土地理院発行の数値地図 25000(空間データ基盤)及び基盤地図情報を加工して作成しました。

古代 -地方の役所と文字文化の伝わり-

古代は、おおよそ飛鳥時代から平安時代後半の院政の開始までにあたります。中国から「律令制」を取り入れ、それに基づいた天皇中心の国づくりが進められました。また、地方では国・郡・里が置られました。文字は、主に役所の役人によって使われていました。なお、当時の新発田市域の大半は、越後国沼垂郡に属していたと考えられています。

市内では、200か所以上の遺跡が見つかっています。当時の人々は、河川の自然堤防上の微高地や段丘の平坦部などで生活していました。

○出土文字資料

【墨書土器】

墨を使って文字や記号などが書かれた土器をいいます。曾根遺跡では「郡」や「上殿」など役所に関係する文字が書かれた墨書土器が出土しています。ほかにも、市内では様々な記号の墨書土器が何点か見つかっています。

【木簡】

文字や絵画などが記された木札です。古代は紙が貴重品だったため、文書や荷札として木簡を使いました。遺跡から出土するものは、再利用できないように切る・折るなどの処理をした後、廃棄されたものが大半です。七社遺跡の木簡も、九九算の練習を行った後、半分に割って廃棄されたと考えられます。

【硯】

文字を書くための道具の一つに硯があります。地蔵潟A遺跡から出土したものは、円面硯と呼ばれています。これは、中央の高まりで墨を磨り、周囲のくぼみに墨汁を溜める構造になっており、複数人で四方から墨を取って使用しました。また、須恵器の蓋の内側を利用した硯は、転用硯と呼ばれています。



曾根遺跡出土 墨書土器「上殿」・「朝」



苜蒲沼遺跡出土 墨書土器「郡」



七社遺跡出土 九九木簡



地蔵潟A遺跡出土 円面硯

中世 -仏教信仰とまじないの広がり-

中世は、おおよそ平安時代後半の院政の始まりから戦国時代までにあたり、戦乱や天災、飢饉や疫病などが相次ぎました。人々は神仏に救いを求め、とりわけ仏教は、民衆にもわかりやすい教えを説く宗派が誕生したことで、広く受け入れられていきました。そのような中で、生活にも様々な宗教儀礼やまじないが取り入れられました。

市内では、350か所ほど遺跡が見つっています。領主がいた大小の城館、集落や寺院のほか、経塚などの塚や供養のために造立された石造物が各所にみられます。

○出土文字資料

【経巻・経筒】

仏教の経典を後世に伝えるために埋められた経巻とそれを納めた銅製容器です。大沢経塚から出土した経巻には、『妙法蓮華経』が記されています。墨朱両方で書かれているものもあり、これは全国的にも例が少なく貴重です。

【経石】

大小様々な川原石に経典の文字を記したもので、塚に埋められていました。経塚は、もともと経典を後世に伝えるために作られましたが、中世後半には経典の文字を石に記して埋める「一石経塚」が築かれ始め、近世に全国的に流行しました。

【墨書板碑】

板碑とは、主に供養のために造立された石製の塔婆です。多くは石に文字などを刻んだものですが、宝積寺館跡からの出土品のように墨書のものもみられます。

【呪符木簡・墨書土器】

まじないに用いたとみられる木簡と墨書土器です。木簡は字がかすれてしまっていますが、赤外線写真から呪句とみられる文字が記されていることがわかりました。墨書土器は、素焼きの小皿にカタカナのような文字が全面に記されていますが、書かれている意味はわかりません。



大沢経塚(叶山経塚)出土 経巻残欠・経筒



岩谷経塚出土 経石



宝積寺館跡出土 墨書板碑



小島西遺跡出土 呪符木簡と
二ツ割遺跡出土 墨書土器

近世 -城跡出土品に見る暮らしの名残り-

近世は、おおよそ江戸時代にあたり、幕藩体制による統一的な仕組みのもと、政治・経済が進められました。その結果、文化や経済の発展に伴って文字も庶民の間に普及し、生活の様々な場面で用いられるようになりました。

市内の近世遺跡を代表する新発田城跡は、初代藩主・溝口秀勝の築城以来、江戸時代を通じて新発田藩の中核でした。

これまでに数度にわたる発掘調査が行われた結果、藩の施設や重臣屋敷の一端が明らかになっています。様々な出土品が見つかっており、文字の記された資料も少なくありません。

○出土文字資料

【年号が記された遺物】

屋根瓦は多数出土していますが、この中に「寶曆九卯」(1759年)と記されたものがありました。ほかには、「正徳」(1711～1716年)と「萬延元」(1860年)とそれぞれ墨書された木簡が見ついています。「正徳」の木簡は同じ字を何度も書いており、文字の練習をしたものと思われる。

【荷札木簡】

二ノ丸北側の一角には、江戸時代後期の城絵図で「蔵屋敷」と記された場所があります。その地点を発掘調査したところ、文字の記された木簡が数多く出土しました。木簡の中には地名・人名・日付に加えて、「御蔵米」の記載もありました。これらの多くが末端を尖らせていることから、木簡は城に納めた年貢米の俵につけられた荷札と考えられます。

【容器に記された文字】

食料品を入れた樽のふたが多く、「志ら雪/越后/住吉屋/芝田」や「塩鱈子」、「越后沼垂/御水飴/あめや九郎三郎」といった商品名や種類・店名などを焼印・墨書したものがみられます。また、外側に「小町紅」と記された磁器の碗(猪口)は、江戸時代の高級ブランド品だった化粧品の容器です。



新発田城跡出土 紀年銘資料



新発田城跡出土 荷札木簡



新発田城跡出土 容器類

令和2年度 新発田市遺跡出土品展

発掘された文字

～地下に埋もれたメッセージ～

編集・発行：新発田市教育委員会 文化行政課

発行日：令和3年2月5日